

平成 26 年度 第 5 回河内長野市文化振興計画推進委員会

【日時】平成 27 年 2 月 17 日（火）午後 6 時 00 分～午後 8 時 00 分

【場所】市役所 5 階 501 会議室

【出席者】

<河内長野市文化振興計画推進委員会委員>

末延 國康・浅尾 広良・荒川 透・今村 尚美・来村 多加史・中道 厚子・長山 公一・
中脇 健児・寶楽 陸寛・水落 学・安福 廸子

<事務局>

（河内長野市教育委員会事務局文化・スポーツ振興課）

大江・森井・上田・東畑・西尾

（ランドブレイン株式会社）

西村・小笹・三浦

【配布資料】

- ・次第
- ・資料 1 本市の文化に関わる現状について（1）～（4）
- ・資料 2 市民アンケート調査の実施結果について
- ・資料 3 本市の文化に関する課題について
- ・資料 4 第 4 回 河内長野市文化振興計画推進委員会 議事録
- ・別紙 市民アンケート調査票

以上

(委員長挨拶)

((1) 計画策定のスケジュールについて)

東畑主査

今年度の委員会開催については、本日含めて2回予定しています。第6回目の委員会は3月16日(月)午後6時からを予定しています。

((2) 市民アンケート調査の実施結果について)

(資料2 市民アンケート調査の実施結果についてランドブレイン(株)より説明)

末延委員長

市民アンケート調査の結果を聞くと、河内長野市の様子が浮かび上がっているように思う。例えば、70歳代の方が社寺仏閣を大切にしている点、交通の不便さと、駅周辺の駐車場が足りていないと感じているといった結果は想像できる。

また、自由意見欄を読んで、東京オリンピックのボクシングの候補選手が河内長野にいるというコメントがあったことには驚いた。事実だとするとすごいことだと思う。ラブリーホールに関するコメントが多く、ラブリーホールに対する市民の期待度を感じられる。30歳代では、文化というもの自体がわからないという意見もあり、認識を高めていかなければならないと思う。皆さんの自由な意見を伺いたい。

来村委員

市民アンケート調査の問2の中で文化事業に関する認知度等を質問しているが、選択肢としてあげている文化事業は、ラブリーホールの実施事業に特化したものなのか。ラブリーホールの実施事業以外も含むとなると、例えば文化財に関する「ぐるっとまちじゅう博物館」事業が入っていない。

東畑主査

選択肢としてあげた文化事業は、文化・スポーツ振興課とラブリーホールが主催しているものを中心にしています。文化財に関する事業やご指摘の事業等はスペースの関係上、今回は選択肢に入れていません。

浅尾委員

以前の調査票の案では、選択肢の中にシティマラソン大会が入っていたが、今回の中には入っていない。

東畑主査

シティマラソン大会に関しては、スポーツに関する分野に入るので、今回はあくまで文化を中心に意見を伺いたいということで選択肢から外しました。

浅尾委員

スポーツ振興も文化に関わるのではないか。

来村委員

問 1 の文化施設に関する選択肢が網羅的なだけに、問 2 の文化事業に関する選択肢が限定的に感じる。一方、問 7 の選択肢には文化財保存活動に関するものが入っているので違和感を感じられる。また、問 11 の生涯学習と社会教育の違いについては、回答者は理解された上で答えているのだろうか。

東畑主査

生涯学習と社会教育の違いについて、言葉の説明は調査票には記載していません。理解されているかどうかは、アンケートの回答者によると思います。

末延委員長

自由意見欄を中心に色々な声が出されており、市民の声を聞くことは必要だと改めて感じる。例えば、20～30 歳代では現実を直視した意見が多く、70～80 歳代では熟年大学を作って欲しいといった意見等が出ている。

来村委員

これからの議論は、文化事業全般についてか、またはラブリーホールの事業評価につながるかどうか、どちらに向けて行うのか。

末延委員長

ラブリーホールの事業評価について前回委員会まで議論したのは、あくまで文化事業全般を議論していくための事例としてである。今回の市民アンケート調査については、文化事業全般の視点から意見を述べて頂きたい。

浅尾委員

問 9 に関しては年代別のクロス集計はないのか。文化振興計画は 10 年間を対象としている。現行計画の策定時点から現在までの変化をみるために、問 9 の結果について、世代間の違い等も考慮したい。

ランドブレイン西村

今はないが、追加することはできる。

末延委員長

10 年間の変化について、このようなアンケートで市民の意見を聞いたのは初めてか。

東畑主査

現行計画が第 1 期計画となるので、10 年間の変化について市民の意見を聞くのは初めてとなります。

来村委員

今回の委員会では、前回私から提案した 3 本柱についても議論しなければならないので

はないか。それについて、市民アンケートがどう役に立つかを議論した方がいいと思う。

中脇委員

まずは、資料 3 の文化に関する課題について見直し、それをベースに議論を進めていくほうが良いと思う。

末延委員長

では、次の議題に移ることとする。資料 3 についてご説明をお願いします。

(本市の文化に関する課題について)

(資料 3 本市の文化に関する課題についてランドブレイン(株)より説明)

来村委員

提案いただいた課題のうち、ポイント 1 については発信力が弱いことが問題である。発信が大事になる。また、ポイント 2 は、世代間の循環ができていないと感じる。世代ごとに要求が変わることはいいが、例えば、お年寄りと子どもが交流するといった世代間の循環の中で解決できたらと思う。ポイント 3 の観光については、観光の基本は感動であると思う。感動がないと人が来ない。感動の提供を基本に考えて行くことが大事であると思う。ポイント 4 はまさに循環についての課題である。市民アンケート結果に、この課題を克服するための情報は入っているのではないだろうか。

末延委員長

文化に関する市民の認知度を高めるための具体的な方法について検討が必要である。市民アンケートにもヒントが出ている。発信がない限り、認知度は高まらない。

中脇委員

発信というと、宣伝・ポスター掲示などを思い浮かべてしまう。しかし、興味のない人には届かない。市民の文化に関する認知度を上げるために、アウトリーチは1つの手法になり得るのではないだろうか。アウトリーチの役割には、高齢者や子どもなど実際に会場に来ることができない人が文化に触れる機会をつくることと、文化について知らない人の認知度を上げることが含まれると思う。

河内長野市におけるアウトリーチの役割・位置付けはどのようなのだろうか。

来村委員

実際にアウトリーチはどのようなことをしているのか。例えば、市民大学へ大学教授が派遣されることもアウトリーチと捉えられる。また、狭義のアウトリーチとして、実際に会場に来ることができない人に対して、文化に触れる機会を提供することとも考えられる。

中脇委員

資料 3 のポイント 2 にあるアウトリーチの分類表をご覧いただきたい。河内長野市のア

アウトリーチに関する現状イメージは、Bであると思う。もう少し、C、Dのようなアウトリーチの意味合いや役割を持たせていってはどうか。

なお、本表では、アウトリーチの役割として、機会提供、課題解決することが示されているが、市民の文化に関する認知度を上げることには言及されていない。河内長野市においては、アウトリーチの役割として、市民の認知度を上げる視点を追加してもいいのではないかと思う。

末延委員長

受ける側で認知度がどう上がったかということと、発信する側でどう発信したかは違う。受ける側の認知度を上げなければ意味がない。

自由意見の中に、河内長野に転入してきたが、文化に関する情報がわからないので、インターネットに情報を流してほしいという意見もある。

来村委員

情報を受け取ってもらうのを待つという受け身では結果が出ない。アウトリーチは自ら出かけて行くことなので、十分に発信になるのではないか。会場に来ることができない人に対して、文化に触れる機会を提供するという福祉的な意味もあるが、文化に関わる人の呼び込みという働きも持っているだろう。

末延委員長

ラブリーホールの事業について、公民館で行う小劇場のような催しを期待する声も出ている。これもアウトリーチに対するニーズであると思う。

中脇委員

市民アンケート調査の結果をみると、河内長野市の文化に対する満足度の理由は、施設に起因するものが多く挙げられている。そうすると、満足度を上げることと、アウトリーチを増やして認知度を上げることとのバランスをとっていくのが難しいのではないかと思う。ラブリーホールが実施する事業のアウトリーチの割合を増やすということは、ラブリーホール内で楽しめる事業が減ることでもある。ニーズと乖離しないか心配である。資料3からも、ラブリーホールの事業数は全国の8倍、アウトリーチ事業数は1.3倍である。比率で考えるとアウトリーチの割合を増やしてもいいのではとも考えられるが、バランスの取り方をどう考えるか。また、行政施策全般を位置づける本計画の中で、ラブリーホールの事業実施に関することをどこまで言い切れるか。

中道委員

アウトリーチ事業が増えるほど、「文化に触れる機会がない」等の市民の不満の声に応えることになり、意味のあることではあると思う。しかし、アウトリーチをするのは簡単ではない。市民の主体性を活用して、市民がアウトリーチの担い手になる仕組みを作ること

が、本当の意味で文化を拡げることになるのではないだろうか。お題目として「アウトリーチを行いましょう」というのは簡単である。しかし、10年後実現できるかどうかは怪しい。やる側も楽しい、やってもらう人も楽しい状況を作れるかどうか。

来村委員

プロの人に市民の文化に対する認知度を高めるためにアウトリーチをしてほしいというのは難しい。プロの活動は、本来劇場で見るべきものであると思う。

荒川委員

文化事業をする側の発信に加え、市民側からの発信も必要であると思う。アンケート結果をみると、皆さんこれほどたくさん言いたいことがあったのだとも捉えられる。声を上げる機会が無かったとも考えられる。つまり、行政の受信力を上げることが必要である。

中道委員

確かに今まで発信は、文化事業を実施する方の発信ばかりで一方向的だったのではないか。

末延委員長

発信しながらその反応を求めることが大切。意見を聞いて、発信を変えていけば、発信力も認知も高まる。ボトムアップにつながるのではないか。

荒川委員

市民アンケートの自由意見欄をみると、文化に興味があっても実際には行かないといった声も多いことから、そう感じる。

今村委員

アウトリーチを受け入れた側の意見を述べたい。アウトリーチを実施した感想として、生徒や地域の人々の印象は良い。一方、アウトリーチの運営に携わることはエネルギーがいる。運営にエネルギーを要することが、学校に広まりにくい一つの原因と言える。音楽教師としてアウトリーチが広がることを願っているが、受け入れ側の担当者の興味がないと、負荷のかかる仕事になる。

また、学校向けのアウトリーチのメニューの選択肢が増えないことも問題である。アウトリーチの提供主体がもっといるのではと思い、期待する部分もあるが、まだ見えていない。学校現場では、受け入れる時期に制約等もある。

中道委員

アウトリーチの受け入れについて、学校現場の教師が負担を抱えないためには、現場が「助けて！」と声をかけることのできるコーディネーターが育つことが必要だと思う。コーディネーターする役割があるともっと進むかもしれない。

中脇委員

課題に関する資料のポイント4にも、連携を押し進める体制の未整備という項目がある。

現状では、行政単体で文化振興を推進するのは限界があり、市民と一緒にやっていく必要性が指摘されていると思う。コーディネーターについては、コーディネーターという人材を育成する仕組みが大切なのか、コーディネートを行う側の仕組み、体制が必要なのか、どちらかを言及すべきだと思う。

宝楽委員

コーディネーターという特別な人材を育成すべきというよりも、コーディネートを行う機能が必要ということではないか。

河内長野市では、生涯学習におけるアドバイザーの役割の方がいるのではないか。

上田主幹

生涯学習アドバイザーはいます。現在は、キックスでの年間の生涯学習関係の業務を行っていただいています。

末延委員長

アウトリーチの実施件数の数字には出ていないが、出前授業を頻繁に行う学校もある。

今村委員

新聞社や JICA など外部の協力を得て行う出前授業もある。

中脇委員

コーディネーター育成より、コーディネートする仕組みが必要との議論だが、ラブリーホールの職員がコーディネートできる専門分野を持ったり、アウトリーチできる人の世話人としての能力を持ったりする方がいいと思う。

中道委員

河内長野の中に、こういった文化の可能性を持つ方と、機会を作れる状況が存在しているのかを、整理する立場の人や場があればよいと思う。文化に対するニーズが起きた時に、お金がなくても何とかアウトリーチ等を提供してもらえる人材がいらないか、可能性を探る等、ニーズとシーズの実態をうまく結べる場所がないと、人材や機会があっても繋がらないということになる。

末延委員長

河内長野につなげる役割のポジションに位置する人は必要だと思う。

水落委員

学校でアウトリーチを行うにあたり、実施に関するコンセンサスは、実施日のどれくらい前までに決まる必要があるのか？

今村委員

理想は前年度中にはアウトリーチを行うことを決定して欲しい。学校では 3 月末にいろんな行事が決まる。年度が変わってからでは、アウトリーチを行うことを決めるのが実際

のところ難しい。また、担当者の異動の可能性があることも、アウトリーチの実施を難しくしている面もある。

中協委員

文化事業を提供する側のコーディネーターに加え、社会教育もしくは学校現場側にもコーディネーターが存在すると、アウトリーチの実施がスムーズに行えると思う。1人のコーディネーターが、複数分野をまたいで調整するのではなく、文化、社会教育、シティプロモーションなど分野ごとにコーディネーターがいることが理想。各分野でコーディネーターを担う人材が結びついていくことも可能だと思う。

今村委員

学校現場でのコーディネート役割は、実際は校長や教頭が行っている。

末延委員長

各学校で配置するのは現実的ではない。市にそういった立場の人を配置して、各学校をまわってもらい、状況を把握してもらおうような形だと実現可能性が高いのではないかな。

来村委員

高校で大学の授業を行う模擬講義の取り組みが広がっている。そういった場には業者が入って行っており、参考になるのではないかな。教育現場に新たな仕事を増やすのは現実的ではない。継続性が保てない。

宝楽委員

協働の現場では、協働事業推進員という役割の職員が各課にいる。こういった立場の方々が市民のニーズを受けながら、行政にそれを伝え、行政の市民ニーズを把握する動きにつなげていけると良いと思う。それが機能していないのも課題ではないかな。

末延委員長

他の課題についてもご意見はないだろうか。来村委員のご発言に、観光は感動といったことがあったが、市民アンケート調査結果をみると、高齢者の方もそれをとても求められていると思う。

来村委員

観光に関しては、ただ神社仏閣をつなげていっても、何も楽しくなく何も生まれない。「行ってよかった、また来たい」と思うところには感動がある。これは芸術の世界でも同じだと思う。移動など負担も多いのが観光だが、それでもまた行こうと思える動機は、そこを訪れた時に得られる感動にあると思う。

安福委員

美術展をするときは、来て、見てもらわないと始まらない。いかに集客するかに知恵を絞っている。集客には、交通事情が大きく影響している。観光も同じである。

末延委員長

河内長野市には自然が多いが、田舎であるということをマイナスに捉えるか、プラスに捉えるかということも大事だと思う。都会化を求めるのではなく、ここにあるものを活かす視点が大切である。

市民アンケートの自由意見欄に、バスの乗り継ぎに関するコメントがあるが、老人パスのような取り組みはあったのだろうか。

森井課長

以前の取り組みですが、65歳以上の方に5000円程度のバス乗車無料券の配布をしていました。今は行っていません。

水落委員

アウトリーチについてだが、特定の施設等に限らず、人が集まっている場所に出ていくことも1つの方法ではないか。市民アンケートをみると、ラブリーホールで実施している事業数に比して、事業の認知度はそれほど高くない。これは、興味がない人は素通りしているということだと思う。市民の文化事業に対する認知度を上げるためには、まず試してもらうことが必要ではないだろうか。試してみて良いと思った人は、文化事業に参加するのではないだろうか。試してもらう、体験してもらう場所としては、例えば、駅等が適しているのではないだろうか。

荒川委員

高齢者でいうと病院等で実施することも考えられる。

中脇委員

例えば、「くろまるの郷」のオープニングイベントでは、ラブリーホールの職員が調整し、コンサートをしても良かったのではないか。人が注目する場や機会に、必ずアーティストがいる状況を生み出す等すれば、市民に文化と出会うきっかけを与えられるのではないか。

宝楽委員

行政内の各部署を横断した取り組みができていないということだと思う。

来村委員

まさに循環ができていない。

中脇委員

市民アンケート調査を作る際にも、今後の文化行政は、地域課題にも取り組まなければならないという仮説を持っていたと思うが、市民アンケート調査の結果をみて、皆様のご意見としてはどうか。想定通りか、想定外か。

浅尾委員

資料2 市民アンケート調査結果のP23に、10年間での変化に関する結果があるが、「情

報発信」はある程度効果を上げていていると思う。しかし、「参加する機会は増えたか」については、ほぼ変化していない。

中脇委員

「知る」から「参加」の流れができていないということだろうか。

末延委員長

参加している人が入れ替わっていない根拠といえる。公民館で言えば、講座の講師等も固定化していると聞く。

浅尾委員

「祭りなどの地域活動の参加」についてみると、参加機会の割合から、ある程度循環ができていていると考えられる。しかし、他の選択肢は明らかに先細りしている。

荒川委員

祭りへの参加に関しては、親から子へとは受け継がれているが、世帯ごと転出すると関係性が絶たれる。新たに転入してきた市民が参加できているかはわからない。新陳代謝しているのではなく、家系のつながりで祭りへの参加が保たれているということだと思う。

中脇委員

「知る」から「参加」に移行させる、参加機会が増えるためにはどうすればいいだろうか。

末延委員長

河内長野市のだんじりは、転入してきた人が参加できないことがあるようだ。一方、例えば四国の阿波おどりは、観光に来た人も「勝手連」を組んで踊ることができる。参加できることでまた行こうと思える。

安福委員

祭りに参加するためには、どこに行き、どこに相談すればいいのかがまず分からない。

今村委員

今年、学校に対して、だんじりへの参加を募集する地域があった。

末延委員長

かつて祭りには外部の人材を入れなかった。祭りも人が減り、形態も変わってきている。

来村委員

行政が祭り（だんじり）への参加を簡単に斡旋できないのは、参加に伴い、安全面で危険なことがあるからだと思う。だんじりは、慣れない人が参加すると怪我をしたり事故になることもある。

末延委員長

祭りへの参加について、地域の側が PR していても、市民が広く知らない、伝わっていな

いことが課題ではないか。

中脇委員

10年前に行われた、現行の文化振興計画策定時点の市民アンケート調査結果と見比べてみたが、資料2のP2、3の質問「事業への認知」において、ポイントが上昇している。「ラブリールホールを利用したことがある」という項目については、前回の市民アンケートでは約59%だったのが、今や76.5%になっている。「かわちながの世界民族音楽祭」の認知度は今回の市民アンケート調査では約50%あり、確実に認知度が上がっている。継続することで、認知度や施設の利用割合が上がっているということだと思う。一方で「文化祭」は、認知度も参加割合も高いが、10年間での変化は見られず、参加する人が固定化されているから上がっていないのかもしれないと思う。

また、「地域での循環を図る」ことは今後の河内長野市の文化振興において、キーワードではあるが、具体的に何をイメージされているのか聞きたい。世代間の交流という意味か。

来村委員

「循環」イコール「世代間」という意味ではないと思う。

中脇委員

「循環」のイメージとしては、初めは人材育成事業などで育った人が、外に出て活動していくということだったと思う。

中道委員

生涯学習では、本人の満足のためだけではなく誰かのために繋がる視点があれば、達成感だけでなく、結果が出てくると思う。そうしたイメージで循環を捉えるとよいのではないか。

中脇委員

「循環」について、誰かのためにつながるという言い方はわかりやすい。

来村委員

生涯学習に取り組まれる際の課題に、学ぶ目的がない場合が多い。自分のためだけということ以外に、選択肢がないのではないか。誰かのために、ということがあると、そこに生きがいが生まれると思う。

お年寄りの知識経験、技術を子育てや青少年育成等に活かす取り組みは何か現在しているのだろうか。お年寄りが子どもや青少年と交流することは、生きがいにつながる。

安福委員

川柳の方が学校に出向いて授業をした事例を聞いたことがある。先ほど、議論の中でコーディネーターという言葉が出たが、学校や地域で授業や講座をしたくても、どこに依頼すればいいのかが分からないことが多い。講師のできる人が顔見知りで、たまたまつなが

することでできるケースも多い。講師はプロでなくてもできることも多いと思う。

末延委員長

市民の中にどのような人がいるのかを、まずは知らなければならないのではないかと。知ることによって発信し、文化事業に対する市民の認知度も高まると思う。

昭和44年に「わたしたちの河内長野」という副読本に執筆委員として関わった。小学生・中学年向けに、地元でどのようなものがあるかという学習が、その頃に始まった。担い手を社会資源として、リサーチする取り組みが始まった。

今村委員

現在もそのような読み物はある。今年は改訂の年で、プロジェクトが立ち上がっている。

中道委員

富田林市では、小学校へ高齢者の方が出向き、1日クラブとして小学生に教えることを継続的にやっているようだ。高齢者の日頃の活動と、文化と子どもを結ぶ取り組みをされている。こうした事例にみられるように、やり方によっては、学校現場に負担をかけないやり方があるのではないかと。

今村委員

青少年育成課で実施している「放課後こども教室」がそれに近いと思う。フラダンス教室、折り紙、手品なども行われているようで、一部公民館活動とも繋がっているのではないかと。

安福委員

文化連盟でも夏休み子ども体験教室を行っている。一日体験の場を持っている。しかし、参加可能な人数が限られているのが運営上難しいと感じるところである。

中脇委員

文化との出会いを提供する際に、プロのように良いものを見せたい、伝えたいのか、文化自体を手段と捉え、交流の場として文化を使うのとは違う。河内長野市では、どちらをイメージされるのかをお聞きしたい。

宝楽委員

今の話の流れからは、社会教育の観点から、文化を「手段」と捉え、交流の場として文化を使うというイメージではないかと。

中脇委員

これまで、行政施策の中で、文化と社会教育の住み分けはあったと思う。今後は広く文化を捉えて、公民館事業の領域まで拡大することになるのだろうか。

末延委員長

中道委員からのご意見にあったように、アウトリーチはプロでなく市民の中から担い手

が出てくるのが望ましいと思う。

来村委員

「本物」に触れさせることは大切。しかし、それは十分な設備のあるホールなどの聞くべき場で聞いてもらえばいいと思う。住み分けが必要ではないか。

中協委員

文化施策の位置づけ・役割が変化していると言える。ラブリーホールの中で、ホール事業もアウトリーチ事業もどちらも担うのであれば、文化施策について、一定の位置づけがないと、大変になるのではないか。

来村委員

ラブリーホールにコーディネート機能まで求めると負担がかかり過ぎる。劇場の事業だけでも相当な負担があると思う。

中協委員

現状、文化の中核を担うのは文化・スポーツ振興課とラブリーホールになる。文化施策、各事業の位置づけと役割をしっかりとしておく必要がある。

中道委員

身近な生活の場面で関心を生み出す、裾野を広げることは必要ではないか。

末延委員長

まず興味関心を引き起こすことは重要である。

中協委員

先ほどの市民アンケート調査の結果からも、「知る」から「参加」を促すための機会提供は、この10年間でできていなかったことだと思う。10年前と比べると認知は上がったが、参加を促すことへは壁があるのだと思う。

中道委員

誰かの役に立ちたいという「貢献」に対するニーズが高齢者にはあると思う。そのニーズに応えられる仕組みを作っていければいいと思う。

荒川委員

今現在、特殊な技術を持っていない方でも貢献のニーズはあると思う。昔で言うと、子どもに遊び一つを教えるということで貢献しているということがあった。

来村委員

アウトリーチを提供する担い手として、募集するのはお年寄りだけでなくもいいと思う。駅前子ども教室の現場で、大学生がそのような役割を担っていたが、非常に馴染みが良い実感があった。現在の市広報では、「ここであなたが活躍できます」という視点での広報はあまりないように思う。

長山委員

広報のあり方についてだが、現状ではパンフレットなども充実しており、体験できるメニューを具体的に PR することはできていると思う。それでも参加しない人を、どうすれば良いのか。

また、資料 1 にあるように、河内長野市内の文化団体の把握は進んでいると思う。ある程度のレベルの人はこうした団体の中にいるであろうし、活躍してもらえばいいのではないかと。人材を登録する仕組みなどにしてはどうか。

浅尾委員

河内長野市にもボランティアの人材バンクがあるのではないかと。

上田主幹

「学びやんネット」というデータベースがあります。しかし、その存在の周知や活用があまりできていないのが現状です。掲載されている人材に対するコンタクトのニーズがあれば、行政が繋ぐことになっています。周知不足もあり、現在は供給過多で、需要が少ない状況です。

来村委員

ホームページの片隅での発信では誰も見ない。やはり、広報紙等で発信する方が効果的だと思う。

中脇委員

先ほど話題になっていた、「観光」の感動を生み出すということについてお聞きしたい。感動を生み出す場所は、これまでの議論では劇場だということだったと思う。文化施設等を観光の一要素とするのか、土地にある観光資源に文化が寄り添う方がよいのか。「観光」の一要素として、劇場に多くの人を呼びこむとなると、ハードルは高くないだろうか。

来村委員

劇場と一般の観光を直接結びつけることはできないと思う。観光資源のガイドや案内のツールとして文化を使うのがよいのではないかと。

末延委員長

あくまで河内長野の資源に感動といった付加価値を付けるということだろうか。

今村委員

過去に行われた、「茅葺き音楽堂」のような取り組みができないか。可能性のある場所はたくさんあると思う。

来村委員

聞く場所が変わると、音楽のイメージも変わる。

宝楽委員

滝畑ふるさと文化財の森センターの一角にある旧梶谷家で、昔ラブリーホールがアウトリーチを行っていた。「ミステリーツアー」と称して間取りを活用し、うまく演出していた。

来村委員

アウトリーチだからこそできることだと思う。

末延委員長

これまでの議論を、宝楽委員よりまとめていただきたい。

宝楽委員

一点目、アウトリーチについては、教育現場、お年寄りの連携などの繋がりをつくることに、コーディネーターの仕組みが必要であることが議論された。また、その際に民間の力を活用すること、分野をまたぐ繋がりを生む「カタリスト」「キュレーター」の必要性があることが指摘された。

二点目、循環の視点については、「知る」から「参加」への変化が10年間でできていないという課題が指摘された。情報を受け取る側の反応を発信する側が受信することの重要性、市民ニーズへのアンテナが大切であることが議論された。また地域の人材や機会に対するリサーチの必要性、特に高齢者等が有する誰かの役に立ちたいという「貢献」へのニーズについて把握する必要があることが確認された。

三点目、観光において感動を生むために、文化が土地の資源にどう寄り添うか、文化がどう付加価値を生むかについて議論が必要であることが確認された。

中脇委員

議論を進めると、具体的にこういう取り組みが必要だという話になるが、それは文化振興計画を作るにあたっては踏み込みすぎているのか。さじ加減が次回以降ポイントになると思う。

末延委員長

次回委員会は、河内長野市全体の文化振興について指針を出す場として進めたいと思う。

次回委員会は3月16日となる。

以上